

C型慢性肝炎に対するインターフェロン 治療後に1型糖尿病と原発性甲状腺機能 低下症（橋本病）を発症した1例

の 野 つかず 和 み 巳¹⁾ い とう やす お 男¹⁾
こ 高 げ なる あき 明²⁾ いま おか とも のり 紀²⁾

キーワード：インターフェロン，1型糖尿病，橋本病，C型慢性肝炎

要 旨

C型慢性肝炎に対して、インターフェロン治療が施行されている。その合併症として、1型糖尿病と橋本病をきたした症例を経験した。症例は65歳，主婦。C型肝炎に対してインターフェロン使用後，高血糖をきたした。尿中CPR低値，グルカゴン負荷でのCPR低値，抗GAD抗体陽性で1型糖尿病と診断した。また原発性甲状腺機能低下症も認め，抗甲状腺抗体が陽性であり橋本病と診断した。インターフェロン治療後に複数の自己免疫性内分泌疾患が合併した興味ある症例であった。

はじめに

C型慢性肝炎の治療としてインターフェロン(IFN)が注目されて久しい¹⁾。肝機能障害に対して，顕著な治療効果が認められる反面，その副作用として自己免疫性甲状腺疾患などの合併症が多数報告されている²⁾。今回，隣ランゲルハンス島および甲状腺の両内分泌腺に対して，自己免疫機序による機能障害をきたした症例を経験した。

症例提示

症例は65歳，主婦。主訴は口渇，多飲，多尿。家族に自己免疫性内分泌疾患，糖尿病はない。既往歴に特記すべきものはない。現病歴は，1994年頃から近医で肝機能障害を指摘されていた。最近徐々に悪化するため当院消化器科受診。C型慢性肝炎を指摘され，IFN治療目的で同科に入院した。それまでに糖尿病を指摘されたことはなかった。2002年4月よりIFN α -2b 600万単位を週3回トリバピリン併用療法を6ヶ月間受けた。IFNおよびリバピリン治療後，口渇，多飲などの症状と高血糖が認められ，当科紹介となり入院精査となった。

Kazumi NOTSU et al.

1) 島根県立中央病院内分泌代謝科 2) 同 消化器科
連絡先：〒690-0825 松江市学園2丁目27-17
大学前のつ内科クリニック